

西会津町公式 Facebook



西会津町 LINE 公式



アタラシイ

この先も長く、豊かな暮らしをつないでいけるように。

「西会津町総合計画」をはじめ、まちづくりビジョンや施策を打ち出しています。

西会津町をつくるのは、この町で暮らす町民一人ひとり。

さまざまなプレイヤーが町を支え、町の勢いを生み出しています。



2026 → 2033

未来へ向かうまちづくりの方向性

こうなったらいいな！西会津 町の将来像

未来を編む。幸せひろがる
日本の田舎、西会津町。

共育の架け橋、明日へのまちづくり



地域が一体となった子育て支援体制の充実により、まち全体での協育環境づくりに努めます。健康な体や豊かな心、確かな学力を育み、未来を拓く子ども達の教育を大事にします。主体的な生涯学習活動を支援し、町民一人ひとりの学びが共育につながる環境整備に努めます。誰もがいつでも、身近にスポーツに親しめる環境を整備し、地域住民同士がつながりあうことを大切にします。地域の歴史を大切に継承しながら、新たな町の文化の創造を目指します。様々な教育が架け橋となって未来のひと・まちづくりを目指します。

地域資源を誇り・繋ぎ・育てるまちづくり



西会津町には、先人たちが築き上げてきた農業・林業・伝統工芸・観光など、かけがえのない地域産業があります。私たちはこれらを単なる「仕事」としてではなく、地域の誇りとして受け止め、その価値を知り、伝え、次の世代に繋いでいくことを使命としています。環境の変化や人口減少の時代にあっても、地域の知恵と技術、そして人の想いを大切にしながら、地域産業を守り育てる持続可能なまちづくりを、住民一人ひとりの手で進めていきます。

健康で生涯いきいきと暮らせる 多様性のまちづくり



町民みんなが心身ともに健康で、生きがいを持ちながら安心して生活できる環境づくりを進めます。世代や地域を超えた交流を促進し、互いに尊重し助け合える、つながりがある町を目指します。

暮らしを守り、明日を彩るまちづくり



人口減少や気候変動、高齢化の進行といった社会的課題に直面しながらも、町民が日々の暮らしに安心と誇りを持てるまちづくりを追求します。特に、雪と共に生きる地域の特性を踏まえた雪対策、老朽化が進む生活・公共インフラの計画的な更新、進展するデジタル社会への対応、災害に強いまちづくり、そして豊かな自然環境の保全は、町の持続可能な未来を築くために不可欠な取り組みです。こうした取り組みを進めることによって、明日をより良く(明るく)彩っていきます。

人と人、自然と暮らし、過去と未来を丁寧につなぎ合わせ、

自然の美しさや穏やかな空気感、

そこに住む人々の温かさを感じ続けてもらえる町を目指します。

日常の忙しさから少し離れ、心を満たす時間を過ごせる場所、それが西会津。

誰もが急ぎすぎることなく、生きることそのものの幸せを感じられ、

どこか懐かしさや安心感を抱ける「日本の田舎」を目指します。

町長あいさつ

西会津町は福島県の北西部に位置し、古くから会津の西の玄関口と呼ばれ、越後街道の宿場町として栄えてきました。町の中央を阿賀川が流れ、万年雪を頂く飯豊連峰を望めるなど、四季折々の豊かな自然環境に恵まれています。また、大山祇神社や鳥追観音如法寺、縄文遺跡などの歴史資源が残り、「会津の霊地」としての信仰と歴史を今に伝えています。

このような特色を持つ本町では、令和7年度に西会津町総合計画(第5次)を策定し、町の将来像「未来を編む。幸せひろがる日本の田舎、西会津町。」の実現に向け、町民・議会・行政が一体となった協働によるまちづくりを積極的に推進し、各種施策を展開しています。

人口減少、少子高齢化に加え、近年では自然災害の激

甚化や物価高騰、デジタル技術の進展など本町を取り巻く社会情勢が急速に変化し続けていく中でも、人と人とのつながりを大切にしながら、町民一人ひとりが笑顔で安全・安心に幸せを実感しつづけられる町を目指し、西会津町ならではの挑戦を続けていきます。

本要覧は、人と人、自然と暮らし、過去と未来を丁寧につなぎ合わせていくこの町の特色をまとめたものです。皆様に西会津町をより深くご理解いただくとともに、今後の町政伸展にお力添えいただければ幸いです。



西会津町長 薄 友喜



町の計画は
こちらから

令和8年度からスタートした新しいまちづくりの指針西会津町総合計画(第5次)。これは、西会津町のまちづくりの最上位計画に位置づけられます。町が目指す8年後の将来像を掲げ、長期的なまちづくりの方向性を明らかにし、この総合計画に基づいてまちづくりを行っていきます。



商いをつなぐことが、
まちを前に進める。
西会津の事業承継。

地域資源を 誇り・繋ぎ・育てるまちづくり。

事業承継は、企業の課題であると同時に、まちの未来に関わるテーマです。西会津町では県内に先駆けて町主導で協議会を設立し、各関係機関と連携しながら、地域資源を次世代へつなぐ取り組みを進めています。



子どもと町民が関わり、
いきいき生きるを、学び合う。
「西会津学びあいランド」

共育の架け橋、 明日へのまちづくり。

学校の授業だけで完結する教育ではなく、町全体で子どもを育てる。さらに学校を地域に開き、町民の新しい学びを促進する。その発想から生まれたのが「西会津学びあいランド」です。町の資源を活かしたこれからの学びのかたちについて、西会津町教育委員会の五十嵐正彦教育長が語ります。



事業承継を、地域の未来戦略に。

人口減少と高齢化が進むなか、町内事業所の経営者も高齢化が進んでいます。商工業の担い手が減少すれば、地域経済の縮小は避けられません。西会津町では、事業承継を単なる経営課題ではなく、地域資源を未来へつなぐまちづくりの柱と位置づけ、支援体制の強化に取り組んでいます。令和3年度には町商工会と連携し、60歳以上の経営者約40事業者を対象に実態調査を実施しました。その結果、多くの事業者が将来的な廃業を検討している実情が明らかとなりました。これを受け、令和5年12月に「西会津町事業承継協議会」を設立。町と商工会に加え、中小企業基盤整備機構、日本政策金融公庫、福島県事業承継・引継ぎ支援センター、福島県よろず支援拠点・金融機関などと連携し、総合的な支援体制を構築しています。

学校を、地域にひらかれた共育、フィールドに。

西会津町には、前教育長から受け継がれている「教育の不易流行」の考え方を土台に、ソフト・ハードともに充実した教育環境が整っています。例えば、企業連携によって実現しているプログラミング教室の実施や、3Dプリンターの導入。小中学校ではChromebookを一人一台導入し、最新の学習ソフトを取り入れながら、学内外でICT教育を推進しています。加えて、欠かせない西会津町の財産は「学校施設」。木のぬくもりを感じる校舎、全天候型の校庭、地域にも開かれた図書館。この学びの環境を活かし、子どもも大人も一緒に学び合う、地域の共育、フィールドにできないか。その思いから、「西会津学びあいランド」の取り組みを2024年からスタートしました。

西会津ならではのテーマが光る学びの「ランド」。

現在は六つの「ランド」があり、西会津町教育委員会の主導のもと、地域の皆さんにもご協力いただきながら、西会津小・中学校を舞台にさまざまな学びの場を展開しています。例えば「探究創造ランド」では、中学校に導入している3Dプリンターやプログラミングなど先端技術に触れる機会を提供。

守るだけでなく、つなぎ、ひろく承継へ。

協議会では、毎月の個別相談会の開催、承継計画の策定支援、専門サイトへの登録によるマッチング支援、後継者向けセミナーの実施など、段階に応じた伴走支援を行っています。令和6年度は15事業所が相談し、4事業所が承継を完了。親族内承継に加え、第三者承継の事例も生まれています。また、地域おこし協力隊制度を活用し、町外からの移住者が事業の担い手となる可能性も広がっています。既存事業の承継を視野に入れた人材確保や、創業希望者と事業者とのマッチングなど、新しい担い手づくりにも取り組んでいます。

事業承継は、会社を残すことだけが目的ではありません。長年培われた技術や信用、地域とのつながり、そして雇用を未来へ引き継ぐ営みです。承継後の経営安定に向けたフォローアップ支援も含め、安心してバトンを渡せる環境を整えていきます。地域の商いを次世代へつなぐこと。それは、この町の誇りを守り、未来へ育てていく営みでもあります。

生徒が活用したり、学んだりできるのはもちろんのこと、今後さらに町民の皆さんにもひろく活用いただける仕組みを拡充していきたいと考えています。「自然体験ランド」では、専門家の力も借りながら校庭にビオトープを整備し、身近な自然から学ぶ取り組みを進めています。西会津町は自然が豊かです。しかし、豊かさが当たり前になっっているからこそ、意識して体験の場をつくらなければ、子どもたちが土や植物に触れる機会は限られているのが現状です。将来は町の花「おとめゆり」を咲かせる挑戦もしてみたいです。「ふるさと未来ランド」では、西会津町の稲作や文化財をテーマに、校舎内のギャラリーを会場に展示会を実施。先人の知恵や工夫を学びながら、未来の暮らしを考える展示に、歴史に強い関心をもつ子どもの姿が印象に残っています。「健康スポーツランド」では、学校の放課後の時間を使って、老人クラブの皆さんと子どもたちがニュースポーツにチャレンジ。ただ身体を動かすだけでなく、多世代交流の場にもなっています。「西会津学びあいランド」は、まだ始まったばかり。子どもたちが地域に学び、町民も子どもたちと学ぶ。そんな、共育、の姿を、これから丁寧に育んでいきたいと考えています。

人に寄り添い、人を活かす。

地域おこし協力隊が実践する

この町ならではの集落支援。



埼玉県出身
小松慎吾さん

広島県出身
佐々木和代さん

大阪府出身
廣田旬紀さん

健康で生涯いきいきと暮らせる 多様性のまちづくり

人口約5,300人に対し、高齢化率は50%超え。年々加速する人口減少・高齢化は、西会津町をとりまく大きな課題のひとつです。そこで町では、集落支援担当の地域おこし協力隊が3名在籍し、それぞれの個性や強みを活かしながら、町内外で人と人のつながりを結び、集落の未来を描く活動に取り組んでいます。3人の言葉から、その思いや活動内容をうかがいました。

暮らしの中で
集落らしさに寄り添う

佐々木さん…私は町内で最も高齢化率が高く、山奥に位置する奥川地区に住んでいます。そして集落支援として関わっているのも奥川地区。暮らしと支援が地続きにある環境です。主な活動は、集落に住む高齢者の方の見守りや、地域行事のお手伝い。表情や歩き方、会話のテンポなど、前回訪ねた時から変わりがなくどうか、少しの変化も気づける関係性づくりを心がけています。なかには、高齢化率が100%に近く「村おさめ」を意識している集落も。でも、それを悲観するのではなく、どうすれば集落の暮らしをより良いかたちで続けられるかを一緒に考えたい。顔が見えるつながりを大切に、この距離感だからこそできる寄り添い方を続けていきたいです。

ゼロイチを
仕組みづくりから支える

小松さん…活動拠点は、佐々木さんと同じ奥川地区。しかし支援先が集落の高齢者ではなく、組織であることが大きな違いです。奥川地区は高齢化率が高くも、県内外から多様な企業や教育機関が行き交い活動している「西会津町の交流人口の入り口」。その受け入れ窓口となり、持続可能な地域づくりを目指す「奥川地域づくり協議会」が令和5年に設立され、

県内初のケーブルテレビ局。
その活用は健康・教育領域でも。

西会津町では高齢者の健康管理を目的として、平成9年2月に福島県内で初めてケーブルテレビ局を開局。以来、県内に先駆けてICTを活用したまちづくりに取り組んできました。平成15年12月にはインターネットサービスを開始、平成20年から平成23年には伝送路の光ファイバー化を行い、現在は町内全域に超高速大容量のインターネット環境が整備されています。新型コロナウイルスが蔓延し、西会津小学校・中学校が休校となった際には、ケーブルテレビを通じたオンライン授業も行われ、町民の暮らしを支える情報基盤として機能しました。一方で西会津町のケーブルテレビの強みは、単なる通信インフラにとどまりません。放送と通信を融合させた「町のメディア」として、地域に密着した情報発信を続けている点にあります。

町の今を伝え、つながりを結ぶ。
地域密着の「さゆりチャンネル」

特にコミュニケーションチャンネル「さゆりチャンネル」では、町の話題や行政情報だけでなく、町民一人ひとりの活動や地域団体の取り組みを丁寧取材。西会津町を拠点に町内外で演奏の場をひ

私は協議会の組織運営に携わっています。会計、補助金申請、運営体制や事業の改善など、内容は多岐にわたります。移住前に、企業で長らくマネジメントに携わっていた経験が、まさに生きています。私の役割はゼロから何かを生み出すというより、今あるものを整理し、活動を継続できる仕組みをつくること。移住者ならではの客観的な視点を強みに、最終的には協議会が自走できる状態を目指していきたいです。

これからの集落を
一緒に考える「焚き付け役」

廣田さん…高齢化率が高いのは、奥川地区だけではありません。町内を見渡すと高齢化率が60、70%の集落はいくつもあります。僕はそうした集落へ重点的に足を運び、支援のあたりを模索するところから始めています。例えば、集落のサロンや集まりに参加し、住民の方の声を聞いたり。集落の人を集めた座談会を企画して、皆さんが思う集落の課題や、やってみたいことなどを話し合ったりと、単に高齢化率の数字だけで集落の実情をとらえるのではなく、皆さんの思いや温度感をすくい上げるように心がけています。そのなかで集落のキーマンになりそうな人を見つけ、そつと背中を押すことも、次につながる重要な一歩。その集落だからできる取り組みを、住民の皆さんと一緒に見つけ、考え、形にしていって伴走者であり続けたいです。

らいている「大山さゆり太鼓」の一年間にわたる密着取材や、令和7年に「豊かなむらづくり顕彰」を受賞した「菅本そば会」の活動、県内外の企業・教育機関と連携して多様なプロジェクトを展開している「奥川地域づくり協議会」の取り組み、さらには除雪作業の現場に夜中まで同行したドキュメンタリー番組など、地域を支える人々の姿を映し出してきました。

「心がけているのは、町民の皆さんの顔と活動が伝わる番組づくり。地域に寄り添い、見た人が元気になれること、それが一番大事なんです」と担当者は語ります。テレビの加入率は98%、インターネット加入率も52%に到達。山間部の集落であっても、町内どこでも等しい条件でネットを利用できることは大きな強みであり、移住・定住やテレワークを促進する情報基盤としても活用されています。

情報があふれる時代だからこそ、「町の今」を伝え、町民のつながりを情報で結ぶメディアの存在はより重要になります。西会津町のケーブルテレビは、放送と通信の両面から、持続可能なまちづくりを支える礎となっています。



放送と通信で、
まちを支える。
人や情報をつなぐ。

暮らしを守り、 明日を彩るまちづくり

子どもから高齢者まで、すべての町民が安心して快適に暮らし、日々の生活を主体的に楽しめる環境づくりを目指して。西会津町では、情報通信基盤をはじめとするインフラ整備に力を注いできました。ここでは、西会津町ケーブルテレビの特徴的な取り組みをご紹介します。

西会津まるわかりMAP

福島県会津地方、新潟県との県境に位置する西会津町。
町のおよそ84%を山林が占め、飯豊連峰をはじめとする
豊かな山々が、暮らしに恵みと彩りをもたらしています。

西会津町 HP



西会津町キャラクター
こゆりちゃん



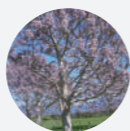
人口

5,300人
令和7年8月1日現在

町章



町の木・花



桐



おとめゆり

面積・森林面積

東西 17.55km
南北 34.50km



各種アクセス

電車バスでお越しの方

東京駅	東北新幹線 1時間20分	郡山駅	JR 磐越西線 1時間20分	会津若松駅	JR 磐越西線 50分	西会津町(野沢駅)
仙台駅	東北新幹線 40分	新郷連絡所	高速バス 4時間30分	新津駅	JR 磐越西線 2時間	
新潟駅	JR 信越本線 20分	JR 徳沢駅				

車でお越しの方

東京	東北自動車道 3時間	郡山JCT	磐越自動車道 30分	会津若松	磐越自動車道 20分	西会津IC
仙台	東北自動車道 1時間30分	新津	磐越自動車道 1時間			

飛行機でお越しの方

札幌(新千歳)	福島空港	タクシーバス 40時間	郡山駅	JR 磐越西線 2時間10分	西会津町(野沢駅)
大阪(伊丹)	新潟空港	磐越自動車道 1時間20分			

観てふれて楽しむ西会津

道の駅にしあいづ

西会津町の特産品やお土産品などが揃う。西会津グルメが味わえるレストランも併設されています。



ロータサイン

温泉付き宿泊施設。身体の芯まであたまる温泉とサウナは、地元民からも人気。日帰り利用もOKです。



西会津国際芸術村

廃校になった木造校舎を利活用したクリエイティブセンター。国内外からアーティストが訪れ、作品制作や展示を行っています。



食べておいしい西会津

地元民にも人気の西会津グルメをご紹介します。心もお腹も大満足の、西会津の食をぜひご賞味あれ！

十割そば

西会津は、そばの生産も盛ん。地元でとれたそば粉を使った風味豊かな手打ちそばが町のあちこちで味わえます。



馬刺し

「日本三大馬刺し」の一つに数えられる会津馬刺し。町内の食堂では、甘い自家製タレと一緒にいただきます。



味噌ラーメン

西会津といえば、味噌ラーメンが有名。甘くてコクのあるスープが人気で、わざわざ町外から足を運ぶ常連客も。

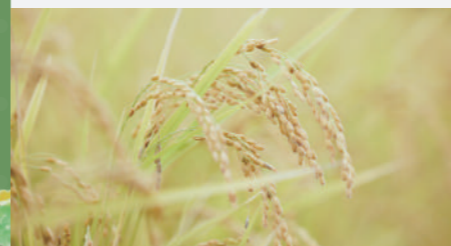


おうちで味わう西会津

お土産にも人気！西会津の気候風土を生かした特産品は、「道の駅にしあいづ」で手に取れます。西会津を訪れた思い出に、ぜひどうぞ。

西会津米

昼夜の寒暖差が大きく、肥沃な土壌と豊富な水源から育まれる西会津米。日本トップクラスの食味を誇るお米です。



ミネラル栽培野菜

町内の契約農家によって、ミネラル分をバランス良く含んだ土壌で栽培した健康素材。瑞々しいおいしさで人気です。



しいたけ・きくらげ

西会津で栽培されるしいたけは、大ぶりで肉厚なのが特徴。全国的に珍しい国産生きくらげも生産しています。



移住した人が いきいき暮らし 活躍する町

西会津町では、地域おこし協力隊を中心にさまざまな個性をもつ人が県内外から集い、この町ならではの暮らしを楽しみながら、地域の資源を生かした活動や事業を展開しています。ここでは、町のにぎわいを生み出している3名の移住者をご紹介します。

農村の暮らしから、 学びと挑戦をひらく宿。

震災を機に福島へUターンし、南相馬市で小中学生の人材育成に携わったのち、「福島を訪れるきっかけとなる宿をつくりたい」と考えるようになりました。その拠点として選んだのが西会津町です。人口が少ない、課題も多くある、それが私にとっては、「新しいチャレンジの余白がある」と感じたことが、移住の決め手となりました。移住後は観光担当の協力隊に着任し、空き家だった元桐下駄屋

株式会社くらしのひととき 取締役 佐々木祐子さん
福島県郡山市出身 2017年に移住

をセルフリノベーションして「ひととき」を開業。現在は(株)くらしのひとときとして、町や福島県を訪れる人の入口となることを目指し、企業の研修やプロボノ受け入れ、子供たちと「小商い」に挑戦する教育プログラムなどを展開しています。西会津の暮らしを通して、自分で課題を見つけ、小さな挑戦と失敗を重ねられる場と機会を育てていくことを大切にしています。



会津の自然や文化を 直にふれられるものづくり。



「自然豊かな場所で、鞆工房を立ち上げたい」。その拠点を探さずに出会ったのが西会津町でした。見渡す限りの山に囲まれ、ふるくから受け継がれてきた手仕事があり、縄文文化も今なお身近に感じられる。「この町でこんなことをしたい!」という意思をもつ若者が集まっていることも魅力でした。移住後は「起業型地域おこし協力隊」に着任し、空き家を改修して工房を開業。協力隊を終

やまあみ鞆製作所 鞆職人 片岡美菜さん
神奈川県出身 2020年に移住



えた今は店舗も運営しています。大切にしているのは、会津の自然や文化から立ち上がるものづくり。町の猟師さんと連携し、害獣として捕獲された動物の皮を利活用したり、出ヶ原和紙や会津木綿、からむし(苧麻)などの素材を取り入れたり。暮らしと自然の関わりの中で生まれた命や素材を、ただ消費するのではなく人の生活の中で生かす。そんな想いでものづくりに向き合っています。

地域の内と外、 ふるいと新しいを橋渡しする。

西会津町をとりまくアート活動や、土地に根付く暮らし。そうした魅力に惹かれ、移住を決めました。その後、「デジタル戦略推進担当」の協力隊に着任。活動する中で、「この町でなら、自分のやりたいことを形にできそう」という手応えを感じ、(株) LONGBRIDGE を創業しました。県内外から訪れる企業・教育機関の方たちの町内アテンドや、「石高プロジェクト」の推進。2025年には空き家をリノベ

ションした文化複合施設「叶や」にて、和紙作家であるパートナーと共に喫茶店「POSSIBLE COFFEE」を始めました。と言っても、単なるカフェをつくりたかったわけではありません。地域の内と外をゆるやかに橋渡しして、町の課題や可能性について語り合う。そんなやりとりが自然と生まれ、日本の田舎の未来と一緒につくる、新しい共同のハブのひとつになれたらと考えています。

株式会社 LONGBRIDGE 代表取締役
POSSIBLE COFFEE オーナー 長橋幸宏さん
東京都出身 2021年に移住



デジタルで描く 日本の田舎の未来

2021年にスタートした「西会津町デジタル戦略」。農業支援や歴史資源の再発見、そして行政の「しごとのDX」へと領域を広げながら、分野横断の取り組みを進めています。デジタル技術を活用し、持続可能な「日本の田舎」のモデルを描く挑戦が続いています。

石高プロジェクト



「お米を買う」という以外に、持続的に農家さんを支える仕組みがつかれないだろうか? そんな背景から誕生したのが「石高プロジェクト」です。参加者は、西会津町の田んぼで米づくりを手伝ったり、SNSで魅力を発信したりと、多様な形で米づくりに貢献。その活動がブロックチェーン技術を活用してトークンとして記録され、貢献度に合わせて「お米」が返礼されます。買い手とつくり手の新しい関係性を築く実験的な取り組みです。



デジタルよろず相談



町では、スマートフォンやタブレット端末の操作方法など、デジタル技術に関する幅広い相談を受け付ける「デジタルよろず相談」を行っています。地域おこし協力隊や専門員が対応し、来訪者の多くは高齢者です。機器の使い方にとどまらず、契約内容の見直しや携帯料金の不安など、日常生活に関わる小さな困りごとにも対応しています。制度や窓口相談するほどではないものの、暮らしの中で感じる不安や疑問に耳を傾けることで、町民の声を丁寧に拾い上げています。

古建築デジタルマップ

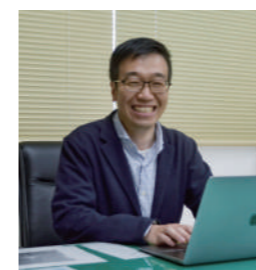


人口減少に伴い空き家が増加するなか、西会津町では歴史的価値をもつ古民家を「地域資源」として再発見し、その魅力を発信する「古建築デジタルマップ」を公開しました。本マップは、建築の専門家による現地調査をもとに、建物のスケッチや歴史的背景を掲載。写真では伝わりにくい構造美や温もりを丁寧に描き出し、建物にまつわる物語とともに紹介しています。さらにGPS機能と連動し、現在地を確認しながら町歩きが可能。古建築だけでなく、飲食店や宿泊施設も網羅しており、「観る・食べる・泊まる」を一体的に楽しめます。



最高デジタル責任者の声

AIで事務仕事を自動化し、持続可能な自治体モデルをつくる。



西会津町最高デジタル責任者 藤井靖史さん

西会津町は「日本の田舎、西会津町。」をブランドスローガンに掲げ、日本の田舎を代表する先進的な取り組みを進めています。その柱の一つが、AIを活用した「しごとのDX」です。これまで行政の業務は事務手続きが大半を占めていました。人口減少に伴い職員数も減っていく中で、この負担をどう軽減していくか。そこで進めているのが、役場業務の自動化です。資料作成の効率化にとどまらず、AIを活用して仕事の仕組みそのものを見直しています。生まれた時間を、本来向き合うべき仕事へ。行政の役割は、住民の声を「翻訳」することです。高齢者と若者、それぞれの意見を受け取り、合意形成へとつなげる。そのために必要なのは、発信力よりも受信力です。「デジタルよろず相談」も、その実践の一つ。暮らしの困りごとに耳を傾ける中で、町の細やかな課題が見えてきます。DXで生まれた時間を、住民と向き合い、声を翻訳し、合意形成へとつなげていく。その積み重ねが、人が減っていく時代においても持続できる「日本の田舎」のモデルになると考えています。

ゆたかな食を 次の世代に継ぐ

西会津町の基幹産業のひとつ、農業。
人口減少・担い手不足といった地域課題が山積する中、
米・ミネラル栽培野菜・菌床キノコを3本の柱に据え
生産振興や販売促進、担い手確保など、多角的な取り
組みを展開しています。

おいしくて、環境にやさしい、西会津町の農業

日本トップクラスの西会津米



お米に含まれる成分を測定し、おいしさを数値化する「食味値」。一般的に80点以上が「良食味」とされ、数値が高いほど粘りやツヤがあり、評価されます。西会津米は例年、平均食味値80点以上をキープ。グルメ著名人もお墨付きのおいしさです。

健康な土づくり事業



「健康な食は健康な土から」の理念のもと、平成10年から続く西会津町の「健康な土づくり事業」。土壌診断に基づきミネラル成分を補い、土のバランスを整えることで、味の濃い高品質な「ミネラル栽培野菜」を栽培しています。道の駅にしあいで販売中。

菌床シイタケ・キクラゲ



西会津産の椎茸・きくらげは、大ぶりで肉厚、プリプリとした食感が特長。菌床づくりから生産まで、一貫して手がけている安全・安心なきのこです。会津管内で乾燥きくらげ生産量No.1の農家もいます。

さすけねえとは会津で「大丈夫」を意味する方言

人生100年時代を 自分らしく生きる 『さすけねえ輪』の 健康づくり



さすけねえ輪で変える！
高齢化率50%の町
健康共創プロジェクト

“3つの健康”を育むまちづくり

西会津町では平成5年から「百歳への挑戦」をスローガンに掲げ、町一体となって健康づくりに取り組んできました。現在は、「さすけねえ輪で変える!高齢化率50%の町健康共創プロジェクト」を推進し、単なる長生きではなく、住民同士が支え合いながら、人生100年時代を自分らしく暮らせる町を目指しています。長野県を全国トップの健康長寿に導いた、諏訪中央病院名誉院長・作家の鎌田實先生の指導のもと、「からだ」「こころ」「つながり」の3つの健康を柱に据えた「さすけねえ輪」の健康づくりを展開。その成果は「平均自立期間」の延伸にも着実に表れ、さらに県内初となる「健康寿命をのばそう!アワード」で最高賞(厚生労働大臣 最優秀賞)を受賞するなど、取り組みは高く評価されています。



第14回健康寿命をのばそう!アワード
生活習慣病予防分野
厚生労働大臣 最優秀賞受賞

西会津米コシヒカリ食味値分布

開催年(出品数)	平均食味値	90以上	89~85	84~80	79以下
令和7年度(60品)	83	0品(0.0%)	24品(40.0%)	31品(51.7%)	5品(8.3%)
令和6年度(85品)	81	0品(0.0%)	15品(17.7%)	50品(58.8%)	20品(23.5%)
令和5年度(96品)	82	0品(0.0%)	23品(24.0%)	53品(55.2%)	20品(20.8%)
令和4年度(110品)	83	1品(0.9%)	28品(25.5%)	69品(62.7%)	12品(10.9%)
令和3年度(106品)	83	1品(0.9%)	31品(29.3%)	60品(56.6%)	14品(13.2%)

年齢別農家人口

15歳~29歳 \ 79人
30歳~59歳 \ 304人
60歳以上 \ 974人

令和2年度 世界農林業センサス
※個人経営体における年齢別世帯員数

高品質な農作物を安定して栽培する、西会津町の農家。経済性だけでなく、自然環境や食べる人の健康に配慮した栽培を心がけています。



西会津町就農
ガイドブック

生産者の声

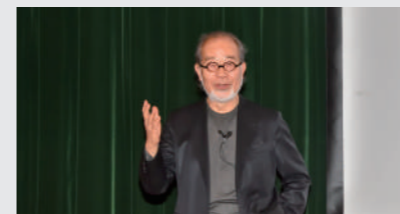


会津きのこ工房 根本大輔さん

プログラマーをやめて、シイタケ農家に。 新しい生き方、働き方を、この町で。

東京でプログラマーとして働いていましたが、働き方を見つめなおし農業の道へ。親戚がいる西会津町で菌床シイタケ栽培を学び、現在は独立して経営しています。未経験で農業をスタートし、自然相手の仕事は思い通りにならないことも多いですが、その分やりがいも大きく、お客様から「おいしい」と言ってもらえた時は苦勞を超える喜びがあります。広々として土地でじっくり農業に向き合える今の環境は、私にとってはいい暮らし方・働き方です。

健康づくり特別講演会



鎌田實先生を講師に招き、2024年に特別講演会を実施。会場には300人を超える町民が集まり、鎌田先生の健康法や健康に対する考え方などを聞きながら、人生100年時代を生きるため、健康づくりに対する意識を高めました。

ワイワイかたろう会



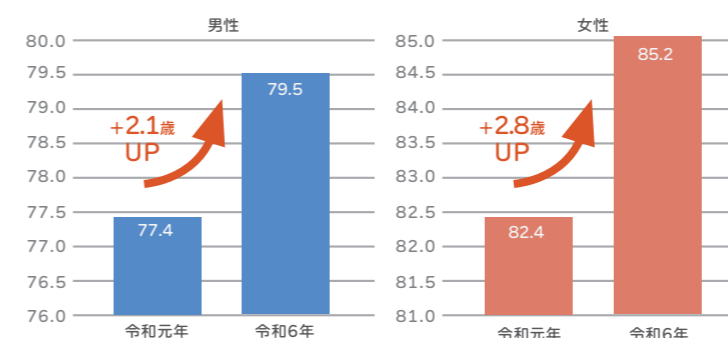
鎌田實先生が元所長を務めた「一般社団法人地域包括ケア研究所」の現所長・奥知久先生と、集落に住む高齢者の皆さんが健康づくり座談会「ワイワイかたろう会」を実施。住民主体のイベントであるのが特徴です。

町民主体で健康づくりを推進



町が実施する「さすけねえ輪の健康づくり」を、町民主体で普及・啓発する取り組みを推進しています。例えば、町の健康増進計画を検討策定する委員会や、町内事業者による食育応援団。子どもへの食育の機会も広く展開しています。

平均自立期間の延伸 令和元年度と5年後の令和6年度の比較



出典：健康増進課調べ
※平均自立期間とは：健康寿命の指標の一つ。日常生活動作が自立している(要介護2未満)平均期間を示したものです。

西会津町のWell-being指標

地域とのつながり

主観的データ
偏差値 **80.0**

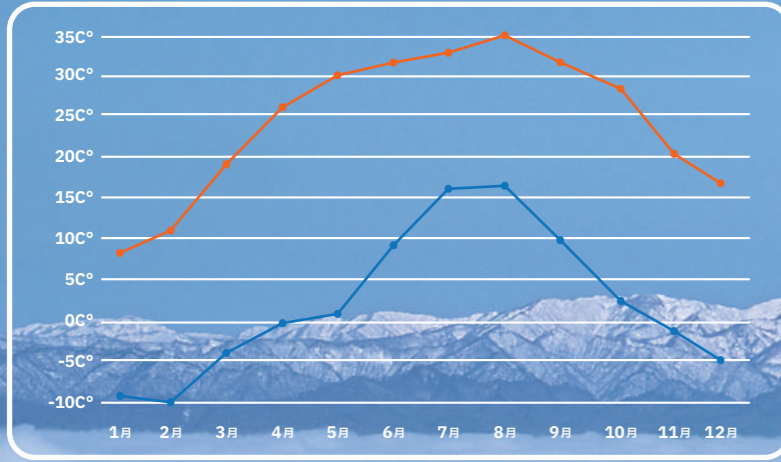
健康状態

主観的データ
偏差値 **77.3**

出典：2025年デジタル庁Well-beingダッシュボード
※Well-being指標とは：主観データ(町民アンケート)の結果と客観データ(健康診断受診等のオープンデータ)を用いて、地域の幸福度や満足度の偏差値を数値化したもの。

寒暖差(月ごとの最高気温・最低気温の平均値)

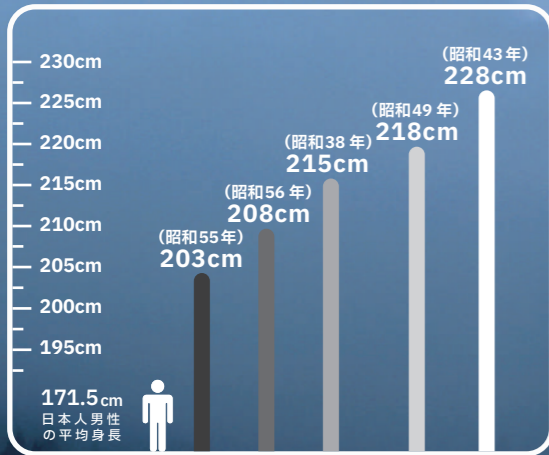
出典: 気象庁



※過去10年間(平成28年~令和7年)の平均値

最深積雪 TOP5

出典: 町建設水道課調べ



降雪期間(月ごとの降雪量) ※過去10年間(平成28年~令和7年)の平均値 出典: 気象庁



厳しくも豊かな自然が育む暮らしの文化

夏は暑く、冬は見上げるほどの高さまで雪が降り積もる西会津町。その厳しい環境は、時に日常生活に支障をきたす課題点になりながらも、自然と共存するなかでわたしたちの暮らしに欠かせない知恵が育まれてきました。

日本有数の豪雪地帯

特別豪雪地帯に指定されているほど、冬から春先にかけて積雪が続く西会津町。その雪は、豊かな水源のひとつとして役割を果たしている一方で、豪雪による被害も絶えません。町では流雪溝や消融雪設備の整備、雪処理担い手の確保、除雪が困難な高齢者への支援など、さまざまな対策を講じています。また毎年2月に開催される「西会津雪国まつり」や、雪室貯蔵施設の活用など、産業や観光に雪を活かす取り組みも行われています。



保存がきく郷土料理

肥沃な土地と豊かな水をたたえ、昼夜の寒暖差が激しいことから良質な米・野菜・きのこなどの農林産物が収穫できる西会津町。その一方で、内陸部に位置するこの町は海から遠く、昔は塩や海産物を入手するのが困難で、棒たら・身欠きにしんなどの乾物が、貴重なたんぱく源として扱われていました。このような環境から、保存のきく郷土料理が次々に生まれ、にしんの山椒漬、棒たら煮、ホタテの貝柱から出汁をとってつくる「こづゆ」、山菜料理などは、今も家庭の食卓にならんでいます。



12月

会津の文化を支えた要衝

福島県と新潟県の県境に位置し、ふるくから越後街道の宿場町として栄えた会津の西の玄関口・西会津町。人や物が行き交う政治・経済の中心地として、発展を遂げてきました。



会津三大宿場町のひとつ

西会津町は、越後へ続く会津の玄関口であり、多くの人や物が行き交う拠点として栄えてきました。特に「野沢宿」は、江戸時代に整備された越後街道の三大宿場町のひとつに数えられ、当時の会津藩の行政・経済の中心地であったことが伺えます。



▲野沢祭礼



▲野沢駅



▲野沢町役場



▲野沢郵便局



渡部 思齋 (わたなべしさい)



山口千代作 (やまぐちちよたく)



野澤 雞一 (のざわけいち)



小島 忠八 (こじまちゅういち)



渡部 鼎 (わたなべかなえ)



石川 暎作 (いしかわえいさく)

西会津町は別名「学者の西会津」とも呼ばれ、明治以降に全国的な活躍を遂げた偉人を輩出してきました。江戸時代の幕末、会津藩校日新館に学んだ渡部思齋が、自宅がある野沢宿に私塾「研巖堂」を設立。野口英世の手を手術した渡部鼎、アダム・スミスの『富国論』を翻訳した経済学者である石川暎作、エール大学で法律を学んだ野澤雞一、自由民権活動家の山口千代作、小島忠八などの偉人が、この塾から次々に誕生しています。

時代を牽引した偉人たち

会津張り子「赤べこ」

江戸時代から明治にかけて、全国各地でつくられた郷土玩具。会津を代表する郷土玩具「赤べこ」は、ふるくから厄除けのお守りや縁起物として、会津の人々に愛されてきました。そんな赤べこづくりのシェアをおよそ7割も占める工房「野沢民芸品製作企業組合」が、西会津町にあります。50年以上にわたり、会津張り子を中心に郷土玩具や民芸品をつくり続けている野沢民芸。手がけた作品は、道の駅「よりっせ」をはじめ、お土産ショップで購入できます。



西会津の伝統産業・出ヶ原和紙

旧会津藩の御用紙として使われていた歴史がある西会津町下谷地区出ヶ原（いづがはら）産の「出ヶ原和紙」。出ヶ原は水源が豊富で、かつては会津地方の中でも有名な和紙の生産地でした。昭和中期頃、後継者不足や大水害などの影響により産業が衰退してしまったものの、現在は和紙職人や地域の人たちによって出ヶ原和紙の再生を試みる活動が盛んに行われています。工房見学や紙漉き体験なども随時開催しています。

縄文時代から栄える文化



日本の最先端をいく縄文文化

町内で確認されている最も古い遺跡「山本遺跡」は、およそ1万5000年前の旧石器時代のもの。ナイフ形石器・彫刻刀形石器・打面再生剥離片・石刃などが出土しています。また、西会津町を含む会津西部は、東北・北陸・関東の文化が混じり合う地域であり、独特の文化が発達しました。なかでも、芝草・小屋田遺跡、上小島遺跡からは火焰土器と王冠型土器が出土されており、「会津タイプ」と呼ばれています。これらの土器は、縄文時代から弥生時代にかけて最も創造性と多様性が見られる土器として注目されており、当時の西会津町の人々は日本の最先端の文化を担っていたとも言えるでしょう。

▼山本遺跡出土品



▼芝草・小屋田遺跡出土品（撮影・小川忠博）



西会津町の歴史は、およそ1万5000年前にまで遡ることができます。町のいたる所で縄文遺跡が発掘され、また会津の霊地としてふるくから信仰を集めてきた歴史があります。



西会津町の豊かな自然を護る「山の神様」

土地のおよそ84%を山林が占め、豊かな山々が広がる西会津町。

山の神様として信仰を集める「大山祇神社」は、「一生に一度の願いは3年つづけてお参りすれば、なじよな（どんな）願いもききなさる（かなえてくれる）」と言われ、年間30万人もの参拝者が訪れています。特に、毎年6月に開催される「大山まつり」は多くの観光客でにぎわい、真冬の寒い時期は、山の神様を水源とする川に晒した風味豊かな西会津産のそばが味わえます。また、本社まで続く4kmほどの参道は「ふくしま遊歩道50選」に登録されており、2つの滝や樹齢400年を超える杉並木も。自然のなかでリフレッシュできるトレッキングルートとして人気を集めています。



会津仏都の祖・徳一大使が創建した如法寺

西会津町を代表する観光地のひとつ、鳥追観音如法寺。平安初期に、会津に仏教を布教した徳一大使が会津の西方浄土のために創建したと伝えられています。鳥追観音は、「会津ころり三観音」のひとつ、また「会津三十三観音番外格」の結願所として、子授け・安産・子育て・厄除け・健康・長寿などのご利益があるとされ、多くの人の信仰を集めています。



西会津町公式HP



日本の田舎、西会津町。



フルクテ

厳しくも豊かな自然環境とともに、文化を育んできた西会津町の人々。

その営みははるか昔、縄文時代から発達し、今にもその知恵は受け継がれています。

山々に囲まれた雪国ならではの保存食文化や、山岳信仰。

ふるくからあるこの町の資産や価値を、わたしたちの手で次代につなげていきます。

